

# 龍谷大学時代の山田盛太郎先生

今西 一

一九六八年春、私は京都の龍谷大学に入学した。文学部の文学科に入学したが、もともと文学を選んだのは、地域の読書サークル運動などをしていて、人民を「啓蒙」するのは、難しい社会科学の本では無理で、革命文学を読むことだ、といった極めて観念的な理由からであった。従って訓古学的な大学の授業など面白いはずがなかった。

そこでもっぱら他学部の授業を聴講する毎日で、文学部の先生は、まさか自分の学部の学生とは思っていなかった。だが、法学部の西村信雄先生（民法）などからは、「今西君、法学部の学生大会が始まっているのに、なぜ君

はここにいるのか」と、お叱りを受けるほど、法学部の研究室に入りびたっていた。

『資本論』を読むなら、直接訳された長谷部文雄先生（経済学部）に聞くのが、一番早いと考え、月に一回長谷部先生のレクチャーを受け、帝国主義論は平野義太郎先生（法学部）に、そして日本資本主義分析や再生産論は、山田盛太郎先生に学ぶのだと勝手に決めて、押し掛け弟子をやっていた。

後年、芝原拓自氏からは「今西君は俺より『講座』派だが、なぜ歴史学だけは、中村哲さんに学んだのだ」と、よく冷やかされていた。中村先生も、

私が学んだ頃は、服部之総や堀江英一先生の理論を学びながら、「講座」派からの脱皮を図っておられた頃であった。一年生の私の山田先生の授業の思い出は、あの独特の字を黒板に書かれながら、戦後日本経済の再生産を、作ってこられた表を中心に話しておられた。後年、山田先生の著作集を読んでわかったが、先生の授業は、東京大学時代のものと、ほとんど変わりな<sup>く</sup>かた。おおよそ相手によって妥協するということがない先生であった。

私は、なにも分からず、先生の再生産論には、対外的契機が弱すぎる、という批判をしたら、先生はフルシチョフのアメリカ訪問や、米ソ関係について、親切に解説して下さった。しかも、驚いたことに、何度目かの授業の後に呼び出されて、先生の抜き刷りを渡されて、読んで意見を聞かせてくれ、と

言われたのである。これには、ただただ恐縮するばかりであった。

統計の好きな先生は、京都に来ると、官報を売っている店を教えてください、と言われ、河原町の書店でアルバイトをしていた私は、いつも仕入れに行く官報までお供した。

その深草から三条京阪まで行く電車のなかで、私が中村先生の研究会などで読んでいた、近世史の藤田五郎の本の「隸農」範疇についての山田先生批判を質問しても、「藤田五郎というのは、ドイツ語の先生ですか」と言ってみるでとりあってもえなかった。

先生の関心は、常に現状にあり、私が卒業論文で、大和の棉作と綿織物のことをやりたいと考えている、という話しをした時も、たまたま三条京阪で雨宿りをした時でもあって、月見うどんをいいただきながら、一時間以上、お

説教をくらった。

「猿のシッポをいくら解剖してみても、人間のことは分からない」、「綿織物のような衰退した産業よりも、鉄工業のような先端産業をこそ分析すべきだ」、「そんなことをやって、日本の革命にとって何の役にたつのか」といった内容のお叱りであった。

山田先生のようなアカデミズムの権化のような人の口から、「革命」という言葉が出るとは夢にも思っていなかった。後に聞いた話では、戦前、先生のミスから非合法活動をしていた岩田義道が逮捕され虐殺された。そのことを先生は一生の負い目として感じていると語っておられた。また先生には、平野先生と二人で日本資本主義論争の思ひ出を語ってもらおうようお願いしたが、戦前のことを話すのは固辞された。

ある日、先生に、日本共産党がプロ

レタリアートのデイクタツラを、「独裁」と訳さずに、「執権」と訳したのを、どう考えられますか、と質問すると、「宮本顕治君は、そんなに外国語ができましたかね」と、相変わらずのトボケタ答えを返しておられた。しかし、六九年の大学「紛争」の時に、一部の学生の暴力行為に対して「ファシズムを思い出す」として断固として反対されていた。

先生の教えに反し、副次的な農村問題や少数者の差別のことに関心を持った弟子を、そして現代社会を、先生ならどう言われるのか、もう一度その声を聞いてみたいところである。

「いまにし・はじめ」小樽商科大学教授

小林賢齊編

『資本主義構造論』

——山田盛太郎東大最終講義（仮題）

予価本体二八〇〇円（近刊）